

科目区分：音楽文化コース

授業科目名：声楽②

授業時間外学習の充実を目指して

音楽教育講座・木村 勢津

I 授業の概要

1. 目的

地方における音楽文化の推進者として、楽曲を正しく解釈し、芸術的歌唱表現ができるために、学びの基本的姿勢の構築と既習の歌唱基礎技術の向上を目的とする。

2. 到達目標

- (1) 作曲家や楽曲について正しく理解し、述べることができる。
- (2) 詩と音楽の関係を理解し、原語で歌唱できる。
- (3) 受講者間で演奏を聴き合い、歌唱について自らの意見を述べることができる。

3. 授業の位置づけ

本授業は、音楽文化コース2年生を対象とした授業で、同コースのカリキュラムマップにおいては、基礎から発展に位置するものである。

2年前期（イタリア古典歌曲の歌唱）で既習したベル・カント唱法の歴史的発展について見識を深め、ロマン派および近代イタリア歌曲について学ぶ。芸術的歌唱表現について多角的視座から考え、自主学習の基本姿勢を養い、続く3年生で開講される声楽③（ドイツ歌曲）、声楽④（日本歌曲）の発展科目や応用科目に繋がる授業として位置付けている。

4. 受講生の構成

受講登録者数は11名であったが、実質受講者は2年生10名である。内9名は2年前期の「声楽①」の単位取得者である。

5. 授業形態と授業時間外の個別指導

各回の授業は、楽曲や歌唱方法についての全体に向けた講義と歌唱の個別指導との組み合わせにより展開した。

授業初日のオリエンテーションで、個別指導受講の条件として、事前に授業担当者によるディクシオンを授業時間外に受講すること、ディクシオンの個別指導受講にあたっては、単語の意味や歌詞の内容を十分予習し、理解

できなかった点も明確にして臨むことを周知し、理解を求めた。

また、受講者多数のため、毎回の授業で、全員の個別指導実施することが困難であり、効率的授業の運営に問題が生じるとの判断から、個別指導は隔週の実施とすること、さらに第11回目の授業に中間発表を設定し、他者からの客観的意見を基に、各自の課題を明確し、最終目標に向けて受講することを提案した。

II. 効率的授業時間外学習のために

1. 授業改善のポイント

本科目は、昨年度のFD対象科目である。昨年度は効率的時間外学習を促進するために、1. ディクシオンの個別指導、2. プログラムノートの作成、3. 他の受講生からのコメントを活用した授業時間外学習の3点を主軸に授業内容の検討と改善を行った。

実技系の授業においては、楽曲へのアプローチ方法を正しく理解し、自分の課題を明確にすることで、時間外学習の効率化が可能となると考えから、今年度は授業時間外学習の必要性を学生自らが認識するための動機付けと内容の充実を目指し、新たな視点から授業改善を行った。

1. ディクシオンの必要性への理解と実践
2. 受講内容のまとめと課題の把握
3. 中間発表による課題の把握

授業改善の成果は、提出された受講票の記載内容および最終授業後に行った「授業改善に関する評価アンケート」（実質受講生10名を対象）の分析により考察を行う。

なお、上記のアンケートは、1を正、5を負とする5段階評価の項目と自由記述により実施し、受講生全員から回答を得た。

2. ディクシオンの必要性の理解と実践

授業では、芸術的歌唱の実践において、言葉と音楽の関係を踏まえて効率的に譜読みを行うこと、その練習方法、またディクシオン

は必要性について講義を行い、授業時間外学習で積極的にディクシオンを行うことを推奨した。

2.1 ディクシオンの必要性に関する講義

第2回の授業でディクシオンの必要性について以下のように説明し、ディクシオンについて、具体的楽曲を例に用いて、実習を行った。

- (1) 日本語の高低アクセントに対し、西欧の言語は、音節の長短が言葉の特徴として挙げられる。詩の形式を正しく理解し、リズムを体感して音読できることは、言葉と旋律の関係を理解することに繋がる。
- (2) イタリア語においては、舞台語の正しい発音が歌唱を助ける。
- (3) ベル・カント歌唱法の基本であるレガート唱法は、単語の発音を正しく理解し発音することが基本となる。
- (4) 詩の朗読には、内容や内包される世界を理解していることが前提となる。歌唱における曲想や音色の構築に、詩の理解は欠かせない。

2.2 授業改善に関するアンケート結果

2.2.1 個別ディクシオンの指導に関して

- ① 個別ディクシオン受講のために、調べた単語や発音は演奏に活かされたか。
- ② 個別ディクシオン指導は、楽曲を学ぶ上で有効であったか。
- ③ 個別ディクシオン指導は、あなたにとって適切な内容であったか。

上記の3つの設問に、10名全員が、「活用した」、「有効であった」、「適切であった」という正の回答を行っており、学びや演奏に有用であったと捉えている。

2.2.2 芸術的歌唱を目指すとき、なぜディクシオンは必要だと思うか。(自由記述)

自由記述の内容は5項目に集約できた。

- A. 詩や曲の意図、背景を理解し、曲を正しく理解した上で、演奏するため(7名)
 - B. 表現の幅を広げるため(3名)
 - C. 正しい発音が歌を歌うために必要(2名)
 - D. 文法を知ること、詩を正しく理解でき、音楽表現に繋がる(2名)
 - E. ベル・カント唱法の基本であるレガート唱法の実践のため(2名)
- 歌唱実践を通して、楽曲の演奏に際しては

その基礎となるディクシオンの重要性を認識できたものと分析した。

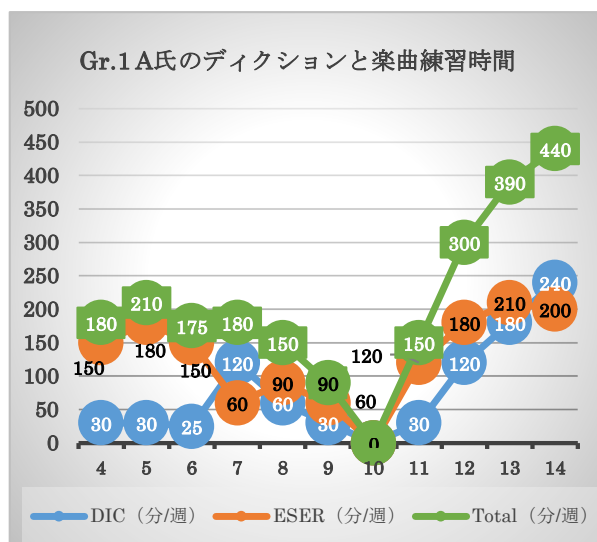
2.3 受講票から見る授業時間外学習の特徴

3曲の楽曲を暗譜で歌唱することを目標とし、第2曲目からは楽曲の個別指導以前にディクシオンの個別指導の受講を義務付けた。

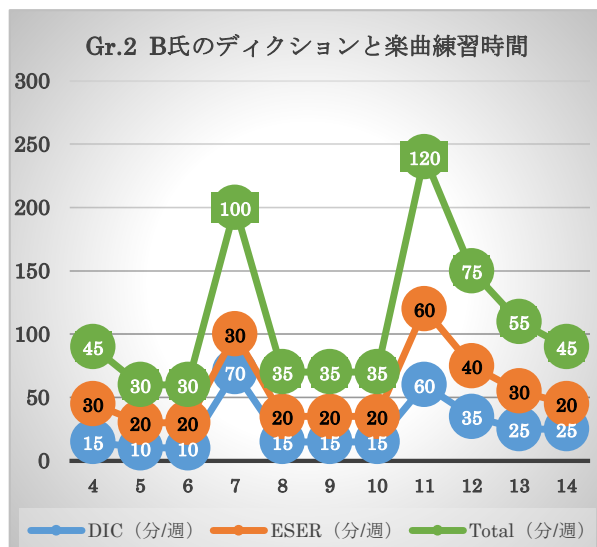
第4回から第14回までの受講票には、ディクシオン(意味調べも含む)と楽曲練習に費やした1週間の授業時間外学習時間の合計を記す欄を設けた。

以下のグラフは、受講生の個別授業時間外学習時間を示したものである。青はディクシオン、オレンジは楽曲の練習、緑はその合計時間を示している。

[Gr.1 授業時間外学習量の多い学生の例]



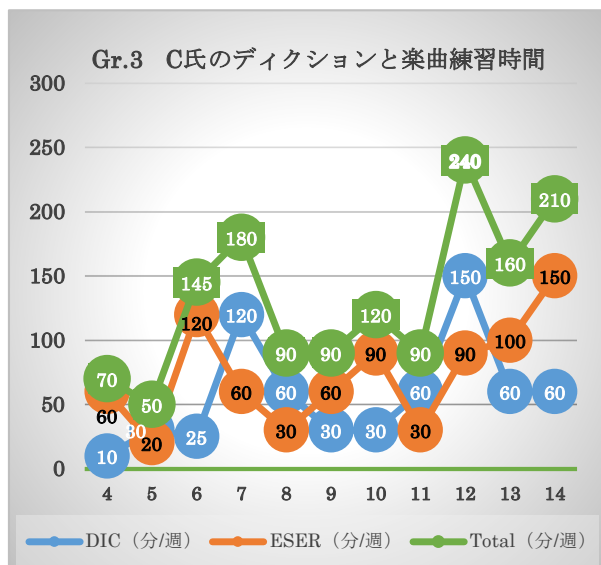
[Gr.2 授業時間外学習量の少ない学生の例]



Gr.1は、全受講生の中で授業外学習時間の総計が一番多かった学生で、各週の推移を示したものである。第10回目を欠席したにも拘

ならず、総時間は10名の中で一番多かった。Gr.2は、単位を認定した受講生の内、総時間が最も少なかった受講生の推移である。

[Gr.3 ディクシオン重点型学習の学生の例]



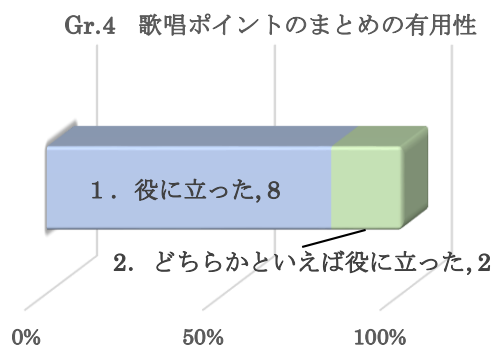
Gr.3は、平均的に時間外学習を行っている学生であるが、楽曲の練習時間よりもディクシオン時間が上回ることが比較的多かった学生の例である。

総じて第12回の時間外学習量の増加は、中間発表後で新曲の準備を行ったためと考えられる。また、ディクシオンの学習時間増加について、その傾向は、全受講生を通じて個別指導を受講した週に認められる。

3. 受講内容のまとめと課題の把握

原則、歌唱指導は、隔週の個別指導であったため、伴奏者以外は、毎回、半分の受講生が聴講中心の受講形態となる。そこで、他者の演奏を自分の演奏に反映することを目的とし、授業で取り上げる楽曲はその演奏のポイントをまとめ、内容を精査して受講票に記載し、翌日までに提出させた。

3.1 歌唱ポイントのまとめに関する満足度



楽曲別歌唱ポイントのまとめについて、有用であったかを問うたアンケート調査の結果がGr.4である。概ね全員の受講生が役に立ったと捉えている。

3.2 まとめが有用であると考えられる理由

有用であったと回答した理由と活用法は、以下のタイプに分けられる。

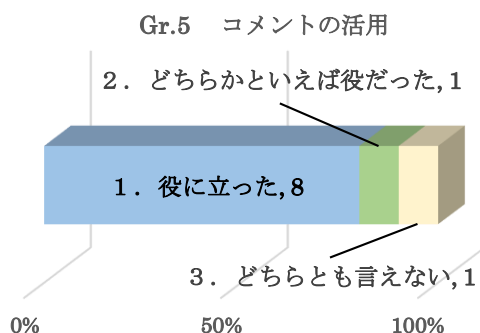
- A. 知識収集型
他の作曲家や時代背景等についての情報を得、特徴や表現方法を学ぶ。
- B. 分析応用型
他の曲との比較や関連を考え、自分の楽曲に活かす。
- C. 学習確認型
授業で学んだことを書くことにより整理・復習し、練習に役立てる。

4. 中間発表による課題の把握

冬休みを挟んで、第11回の授業に中間発表の演奏を設定した。中間発表に際しては、自分の演奏曲に関するプログラムノートを作成し、当日、プログラムと共に配布して、熟読した後、演奏を行い、各演奏へのコメントを求めた。コメントは、演奏者毎にまとめて、受講者へ手渡し、後半の授業課題を明確にする工夫を行った。

4.1 コメントの活用

アンケート調査の結果は、Gr.5に示すとおり、概ね役に立ったとする学生が90%である。



4.2 コメントの具体的な活用

他者からのコメントの活用に関する主な記述を以下に記す。

- 客観的なアドバイスにより、自分の歌唱がどのように伝わっているかを知り、課題とした。
- 指摘された悪い点を改善できるよう練習に励んだ。

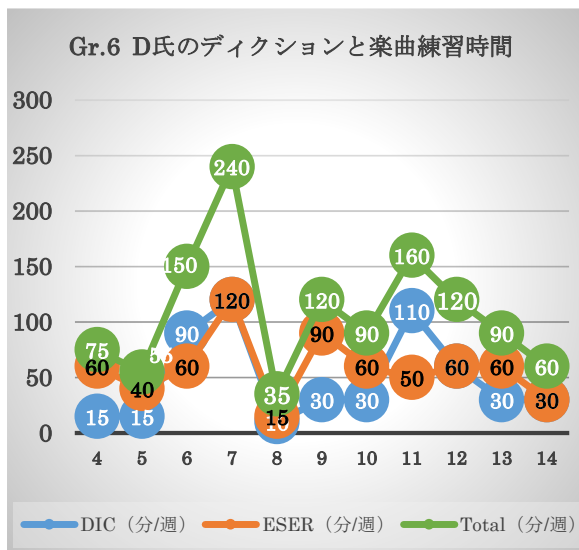
- 自分の課題が見えた。
- 自分の足りない部分を明確化でき、モチベーションが上がった。
- 具体的改善方法を参考に、練習に励むことができた。
- 改善点を述べていることは、試してみた。
- 全く歌い手として劣っていると思ったが、少し自信にもなった。
- 他者のプログラムノートを参考に、今後のプログラムノートの書き方を工夫したい。

コメント作成の留意点として、プログラムノートに沿った観点で、良かった点と改善点を必ず記載するように指導した。客観的意見として、耳を傾け、自らの課題として受け止めていること、また、改善点に関する授業者以外からのアドバイスを積極的に取り入れ、授業時間外学習に活用していることが読み取れた。

4.3 中間発表以降の学習姿勢

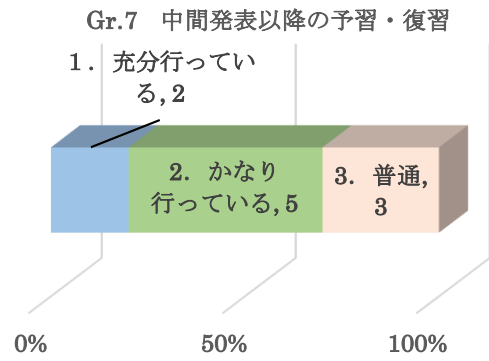
Gr.6は中間発表後、ディクシオンの練習時間増加が認められた受講生の授業時間外学習時間の推移を示したものである。総じてディクシオンの練習時間が短く、個別指導の週に集中して練習する傾向が認められる受講生だったが、中間発表以降は、ディクシオンに関しては約2倍の練習時間を確保している。

[Gr.6 ディクシオン練習時間増加学生の例]



この受講生以外にも Gr.1 で示した受講生は全体に右肩上がり、Gr.3の受講生も楽曲練習を中心に学習時間の増加が認められた。

Gr.7は、中間発表以降の、授業準備と復習について、積極性を問うた結果である。

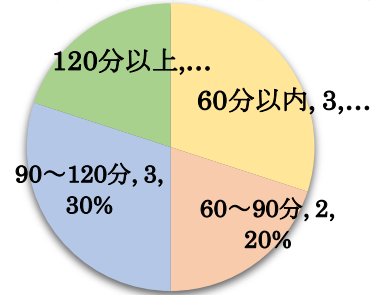


半数の受講生は、中間発表を機に予習、復習を積極的に行うようになったと回答している。

5. 週平均の授業時間外の学習時間と内容

Gr.8は第4回から第14回までの週平均の授業時間外学習時間である。

Gr.8 授業時間外学習の週平均時間



■ 60分以内 ■ 60～90分 ■ 90～120分 ■ 120分以上

授業時間を上回る授業時間外の学習を行っている受講生は50%で、60分以内の学習時間の受講生もほぼ60分に近い時間は確保できているが

III. まとめ

実技系の授業においては、授業時間外の学習の充実なくして技術の修得はあり得ない。その自覚は有しているが、より充実した学びとなるよう、曲数の提示等による的確な目標の提示と中間発表の設定、更にディクシオン個別指導で、個々の課題の認識に対する自覚を促した。具体的に数字の表記を行っていないが、総練習時間と演奏内容の充実には正の相関関係が認められた。

また、学生主催の楽友会コンサート直前の11月後半から12月に、全受講生において、学習時間の減少傾向が認められた。この時期は後期の充実が求められる時期である。課外活動の保証と共に、効率性の高い学習のあり方と指導について、更なる検討を加えたい。